



新しい時代へ

『日本書紀』は、持統天皇が文武天皇に譲位するところで記述を終えます。今回ご紹介する歌は、即位前の文武天皇(軽皇子)とその父で



日並皇子の命の馬並めて御獵立たしし時は来向かふ

訳

日並皇子の命が馬を連ねて今しも出獵なさろうとした、あの払暁の時刻が今日もやがて来る。

柿本人麻呂 卷一 (四九番歌)

ある草壁皇子(日並皇子)に関わる歌です。

この歌は、持統朝に軽皇子が宇陀の阿騎野で遊獵した際、柿本人麻呂が詠んだ歌の一首です。この

時、既に草壁皇子は亡くなっていたようです。草壁皇子は、天武・持統天皇の子で、将来天皇になることが有力視されていました。即位することなく亡くなってしまう

ます。『万葉集』には、その死を悼む歌が数多く収録されており、彼の死が重大なこととして受け止められた様子が伝わってきます。

その歌の中には、草壁皇子の従者が、皇子に従って宇陀に行った際のことを詠んだと思われるものがあります(巻二・一九一番歌)。また、『日本書紀』天武九(六八〇)年三月には、天武天皇が「兎田の吾城(阿騎野か)に行幸したとあり、万葉歌に見える草壁皇子の宇陀行

きも、この行幸に係している可能性があります。このことを踏ま

えると、今回の歌は、軽皇子が亡父ゆかりの地を訪ねた際に詠まれたものだったと思われれます。

さて、今回の歌と同じ歌群には、軽皇子に付き従った者たちが、阿騎野という思い出の地で草壁皇子を思うと眠れないという歌、さらに夜明けを詠んだとされる歌も詠まれており、その最後に今回の歌が詠ま

れます。天皇になるはずだった偉大な皇子が出獵しようとした時刻がやってくるというこの歌は、軽皇子の姿に草壁皇子の姿を投影しているのかもしれない。

父から子へ、周囲の人々が思いを託した軽皇子は、やがて大宝律令の施行など、重要な政策を実行した文武天皇として歴史に名を残すこととなります。

(本文 万葉文化館 吉原啓)

阿紀神社(宇陀市)

垂仁天皇の皇女倭姫命が天照大神を祀った宇多の吾城(阿騎)宮が起りとしてされています。神明造りの本殿と非常に珍しい能舞台があり、寛文年間から大正時代にかけて能楽興業が行われていました。現在は当時を偲び、毎年6月中旬に「あきの螢能」を開催。能の最中に明かりをおとし、螢が闇に放たれる瞬間は圧巻です。



所 宇陀市大宇陀迫間
 関 宇陀市観光協会(宇陀市商工観光課内)
 ☎0745-82-2457

